

二〇一六年八月一九日

反論をする気も失せし大暑かな  
おいとます月下美人の香に酔ひて  
路地涼し猫の屯す漁師町  
梅花藻の花星屑のごと揺るる  
蛸や奈落へつづら折る山路  
豊秋をニタ分したる大河かな

たか子  
なつき  
まゆ  
なおこ  
うつぎ  
治男

二〇一六年八月一八日

白無垢の蓮の宝珠や神の池  
真白な築地堀越え黒揚羽  
朝散歩犬の鼻先露の玉  
新涼や魚板を打てば音澄める  
愛猫の露まみれなる朝帰り  
龍の目のごと暗雲の望の月

はく子  
菜々  
克子  
宏虎  
まゆ  
智恵子

二〇一六年八月一七日

闇に映ゆ五重の塔や万灯会  
暗闇にどよめく声や大文字  
離陸機の尾灯瞬く涼しさよ  
作業着のままに飛び入り踊りの輪  
奥宮へ昼も小暗き露の磴

ぼんこ  
宏虎  
ひかり  
さつき  
菜々

二〇一六年八月一六日

湯上がりの宿下駄鳴らし庭涼し  
稜線のシルエット浮く揚花火

よう子  
智恵子

茅葺の屋根匂ひ立つ夕立かな  
影絵めく浜の人垣花火待つ  
惜しみなき拍手の湧きて花火果つ

うつぎ  
さつき  
さつき

二〇一六年八月一五日

早田の亀甲にひび走りけり  
とんぼうのへの字に休む竿の先  
大輪の十重に二十重に揚花火  
遠ざかる子らの尾灯や盆の月  
庭涼し水面に木々の水彩画

まゆ  
たか子  
さつき  
菜々  
満天

二〇一六年八月一四日

高階のテラスに小さき門火焚く  
夕立の予報空振り庭に水  
土手草を刈れば空き缶ごろごろと  
池の面の樹影を縫ひてとんぼ飛ぶ  
引き取り手なき豊作の胡瓜かな

たか子  
明日香  
まゆ  
ぼんこ  
豆狸

二〇一六年八月一三日

青嶺また青嶺を縫ひてハイウェイ  
厨事急かせるつるべ落としの日

なおこ  
たか子

毎日句会みのる選・二〇一六年八月二日